一宮市博物館　1996.3

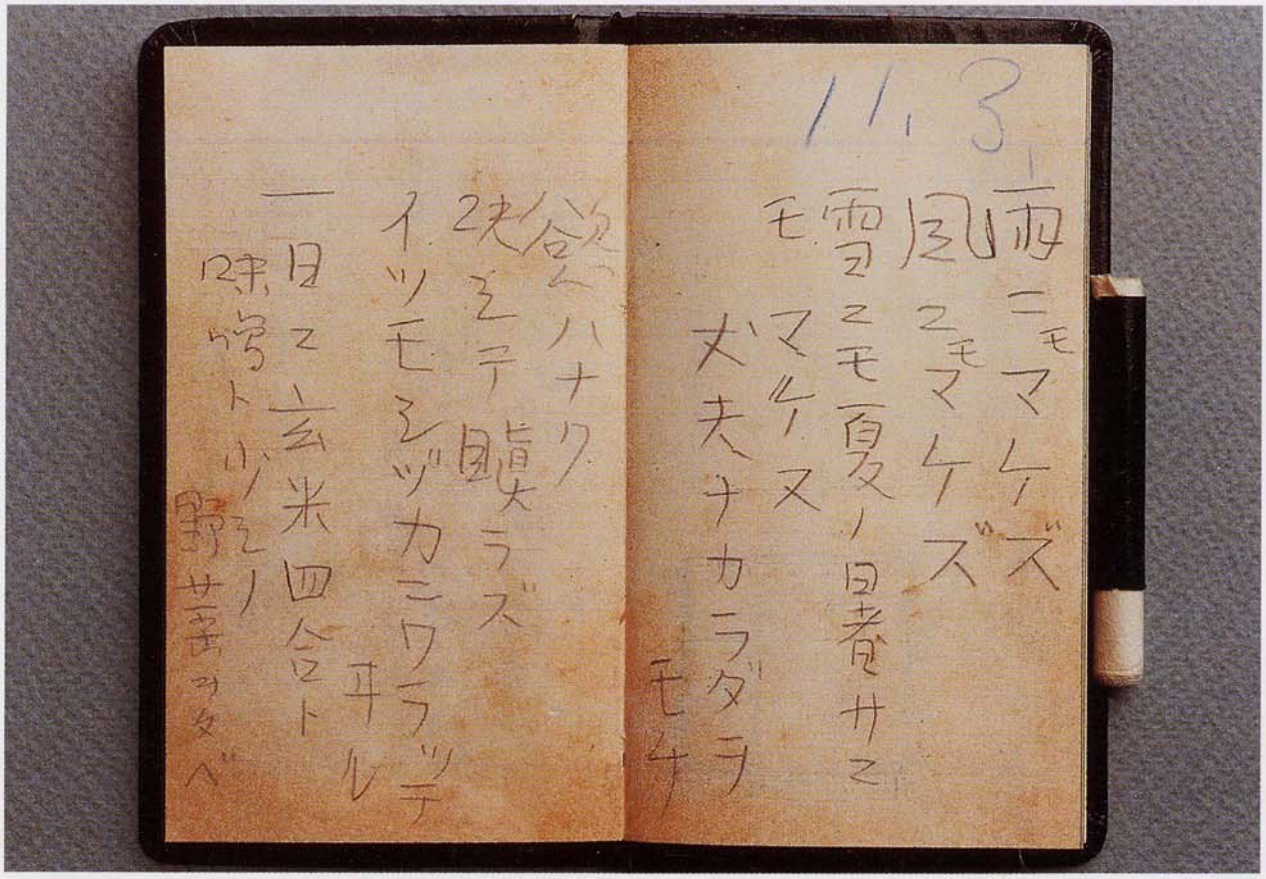
博物館だより

NO.21

宮沢賢治生誕百年記念
春季特別展

「賢治・志功・一英—児童文学を巡る人々—」

平成8年4月27日（土）～5月26日（日）



雨ニモ負ケズ手帳（複製）

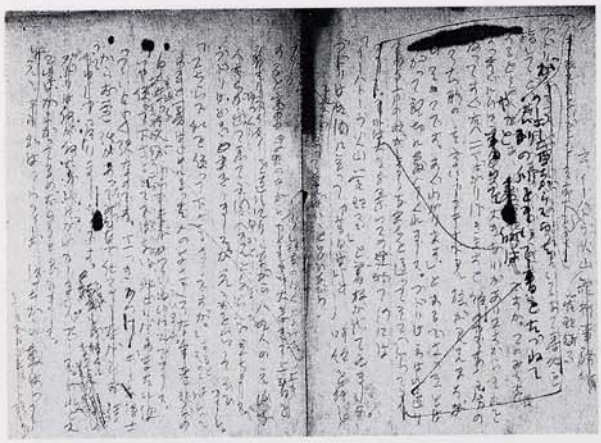
長編詩「大和し美し」等で知られる郷土の象徴派の詩人佐藤一英（明治３２年生）は、同詩を完成させた昭和６年から翌年にかけ児童文学の革新を目指した雑誌「児童文学」２冊を編集、東京・文教書院から発行しました。一英は新進気鋭の文学者や画家の発掘に努め、両号にその当時殆ど無名であった宮沢賢治（明治２９年生）の代表作となる長編童話「北守将軍と三人兄弟の医者」・「グスコーブドリの伝記」の２作品を掲載しました（未刊の第３号に寄稿予定であったのが「風の又三郎」）。「大和し美し」等で名声を博す世界的版画家棟方志功（明治３６年生）も「グスコーブドリの伝記」等の挿絵を描いて参加しました。一英と志功が回合したのは、昭和５年とも聞いています。

本特別展は、賢治生誕百年を記念して、昭和初期、文壇や画壇に新風を吹き込みつつあった彼ら三人相互の交流と研鑽を探ろうとするものです。

1. 宮沢賢治生誕百年にあたって

宮沢賢治は、明治２９年８月２７日、現在の岩手県花巻市に生まれました。生前殆ど無名だった賢治は、心象スケッチ『春と修羅』(詩集、自費出版) とイーハトブ童話『注文の多い料理店』の二つの著作を遺したのみで、昭和８年９月２１日、３７歳で亡くなりました。賢治は、農業指導を始めとした科学者としての実践と深い仏教への帰依とから世界人類全体の幸福を追い求めるとともに、多数の詩や童話を書き貯めました。

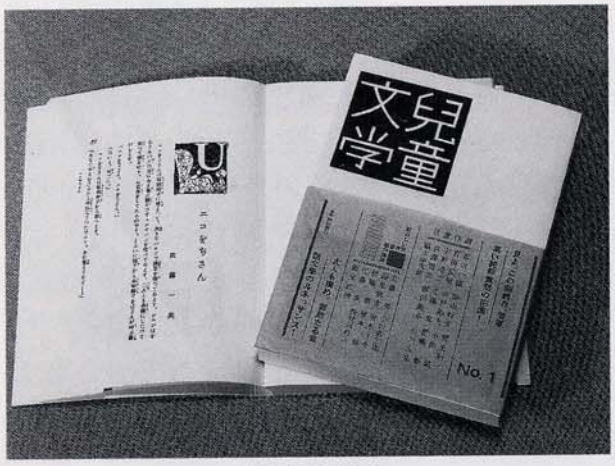
賢治は、昭和６年、佐藤一英編集の雑誌「児童文学」NO. １に初の長編童話を発表しますが、棟方志功も挿絵を画いて協力しています。賢治生誕百年を記念して、本展覧会は、昭和初期に於ける彼ら三者の交流と研鑽を探ろうとするものです。



グスコーブドリの伝記原稿

2. 児童文学の時代

昭和６年、満州事変勃発。昭和７年、満州国建国宣言、五・一五事件が起きるなど、雑誌「児童文学」が出版された時代は、時局が第二次世界大戦に向けた戦時体制へと突入していく時期でした。この時、「純粋童話・詩的童話」をモットーに「児童文学のルネッサンス」を目指す季刊雑誌の予定で、一英は「児童文学」NO. １・NO. ２を編集、東京の文教書院から発行しました。６年７月刊のNO. １には、賢治・一英の他に横光利一 (「面」)、石川善助 (「海に忘れられた人形」)、福士幸次郎 (「豚泥棒」)、百田宗二 (「わたり鳥」)、伊藤整 (「イエナと月」、「眠り羊」)、宇野浩二 (「人にすぐれた芸」) らが、７年３月のNO. ２には、前号の執筆者に草野心平 (「風船はあがりたくありません」、佐藤春夫 (「幼児の夢」) らがいました。



「児童文学」

3. 賢治と一英

賢治と一英は、熱烈な数通の手紙の交信は有ったものの、直接の面識は有りませんでした。昭和４年に知りあった詩人石川善助を通じて賢治を見い出し、児童文学への投稿を勧めました。特にNO. ２は大部分賢治のために編んだと、後に一英は述懐しています。その頃、善助は草野心平の処に下宿していたことがあり、また心平は、賢治の『春と修羅』を読んで感動、心平主宰の詩誌「銅羅」(大正１４年創刊) に勧誘、賢治は１３篇の詩を発表しました。心平から善助へ、善助から一英への経緯で、一英と賢治は交流したものと思われます。賢治は、両号に「北守将軍と３人兄弟の医者」「グスコーブドリの伝記」(伝記の方は志功挿絵) を発表。未刊に終ったNO. ３に「風の又三郎」を用意していました。

観音経曼陀羅

4. 志功と一英

志功と一英は、昭和５年頃回合したと見られています。最初の共働作品が、昭和６年「児童文学」NO. １誌での一英の「マフィンちゃんの三つの望み」への挿絵でした。１１年、志功は一英長編詩「大和し美し」(６年詩作) を版画巻に制作、民芸運動の柳宗悦に認められ、世界的大版画家への足掛りを掴んだのは周知の事に属します。翌年にも志功は一英詩を基にして大作「空海頌」「東北経鬼門譜」を世に問います。従来志功と一英の版画としての交流はこの３作のみと見られていましたが、一英の和訳「観音偈」(１２年「大宝輪」に発表) の強い影響の下に、翌年「観音経曼陀羅」が制作されたことが、一英の未発表原稿により主張されつつあります。

(小野田雅一)

新コーナー　　遺跡探訪（1）

今回は、(財) 愛知県埋蔵文化財センターの樋上昇さんに最新の成果をご寄稿いただきました。

八王子遺跡

(財) 愛知県埋蔵文化財センター
樋上　昇

八王子遺跡は一宮市の東南部に所在する遺跡で、地形的には日光川左岸の自然堤防上に立地している。本遺跡の南西約1㎞には弥生後期の土器様式の名称で知られる山中遺跡（弥生前・後期）をはじめとする萩原遺跡群が同じ自然堤防上に展開している。

この遺跡は従来、弥生時代の遺物散布地として知られていたが、正式な発掘調査はこれまで一度も行われてこなかった。今回は東海北陸自動車道の建設にともない平成7・8年度の2年間にわたって（財）愛知県埋蔵文化財センターが調査を行うこととなった。本年度の調査面積は8734㎡である。

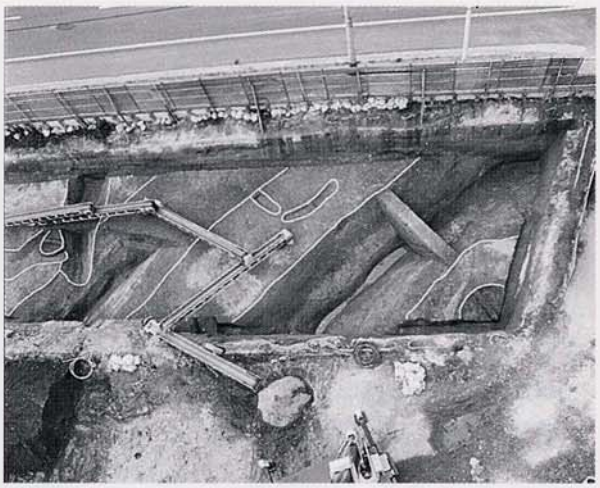
現在までの調査で、弥生時代前期から鎌倉・室町時代にかけての遺跡であることがわかってきた。弥生時代には、本年度の調査区ほぼ中央を北東から南西に幅100mを超える巨大な旧河道が走っており、その北で前期の環濠が1条、総延長約70mにわたって見つかった。環濠の外では石器製作の際に出た石屑を捨てた土坑が2基と1辺3mの小型で四隅に陸橋部をもつ方形周溝墓を1基検出した。

中期前半には居住域が拡大し、前期の環濠の北に2条の環濠が掘削される。内環濠からは朝日式から貝田町式にかけての土器が数多く出土している。居住域内は竪穴住居や土坑・溝などが複雑に錯綜して見つかっている。この時期の居住域はほぼ全面に火をうけた痕跡があり、その上を炭化物や焼土がまじった土で整地している。

その後、中期後半（高蔵期）には3基の方形周溝墓（うち、2基は造り替え）が築かれており、この時期には墓域に変わっている。

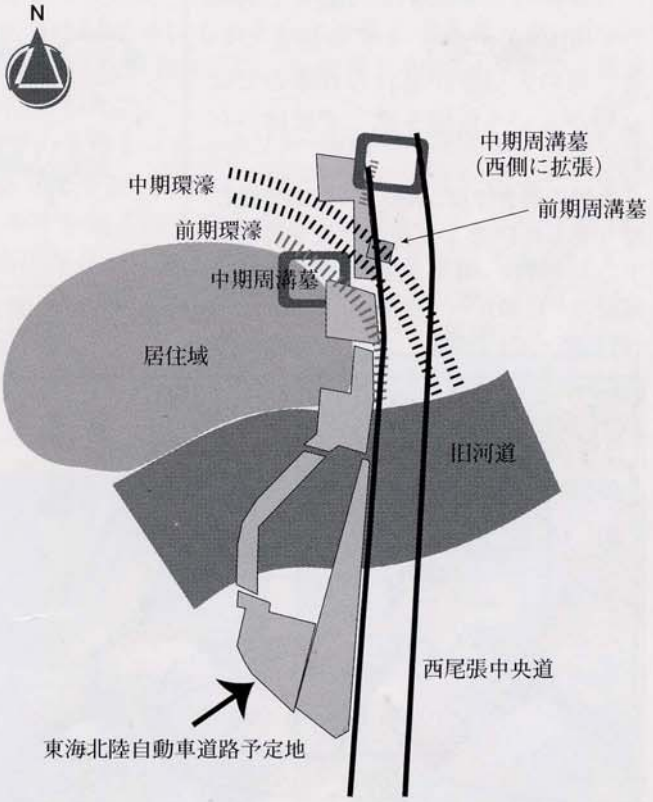
弥生時代後期から古墳時代前期には巨大な河道が急速に埋没して小規模な谷となり、この谷の南側に広大な居住域が展開している。また、谷の北肩から銅鏃3点のほか、小形丸底土器や高杯・器台・パレス壺などの多量の土器や鍬・鋤・斧柄・容器など多様な木製品が出土している。

このほか、古墳時代中・後期の溝や奈良～平安時代前期の掘立柱建物群・土坑墓群、鎌倉～室町時代の屋敷地など、弥生時代から中世までほぼすべての時代を網羅した遺構群が展開している。



弥生中期二重環濠検出状況

弥生時代前期の環濠集落は愛知県下でも数少なく、さらに中期の環濠も同時に見つかった例はきわめて稀であることから、尾張北部における弥生時代の拠点集落のひとつにあげられよう。また、弥生時代後期以降も衰退すること無く、古墳時代前期には最盛期を迎え、さらに中世に至るまで連綿と継続していくような遺跡は愛知県内のみならず、全国的にも珍しい。今後、濃尾平野の弥生・古墳時代を語るうえで、この八王子遺跡は欠かすことのできない遺跡であるといえよう。



八王子遺跡弥生時代集落概略図

民俗探訪（7）　木曽川の大網

一宮市の北側を流れる木曽川は、かつてはスズキ（地方名：ｽｽｷ）やサツキマス（地方名：ｶﾜﾏｽ）といった川の魚としては大形の魚類が遡上する豊かな川であった。昭和の初めごろまでは、大網・メセキ網と呼ばれる地曳網漁も行われていた。しかし、河口部での海苔養殖が盛んになるとともに遡上魚が減少し、大網は昭和10年ごろには行われなくなってしまった。

マスの大網漁の様子―昭和初期（写真提供：可児幸彦氏）

博物館に北方町宝江の大川善六さんに寄贈していただいた大網の一部分である漁網が２点収蔵されている。マスの大網と思われる１つは長さ約15ｍ、高さ5.83ｍ、網の目の大きさ3.8cm、浮子（ｱﾝﾊﾞ）が34個、100ｇを越える漁網錘（ｲﾜ）が99個装着されているものである（図1-1～3）。大網はこの網を６枚ほどつないで作ったもので、つなぐ枚数は漁の規模で変えた。河口に近いところで使われた300ｍ前後の地曳網に比べると、規模が小さかった。大網は、マスが遡上する３～５月に使われた。右上写真は、現在の木曽川橋より上流にあった旧木曽川橋の影に「おじて」（こわがって）たまったマスを大網で捕獲しているところである。愛知県側での操業であることから、宝江の大川さんである可能性が高い。岐阜県側では、川島の漁師が操業していた。収蔵されているもう１点はメセキ網と言い、イワがイワ縄（ﾀｷﾅﾜ・ﾀｹﾏ）に隙間なく装着されているもので（図1-4）、主にアユを８月～10月にかけて捕獲したものである。長さ約12ｍ、高さ約４ｍで、網の目の大きさ2.6㎝、アンバ28個、10匁前後のイワ245個が装着されている。これはさらに小規模で、図２のように上綱２人、下綱２人、船上での指揮者１人の最低５人で操業することができた。

この大網も使われなくなって60年を過ぎようとしている。先日、この網をくださった大川善六さんに会いにうかがったが、すでに故人であった。川の文化が一つずつ消えていき、川の大切さが忘れられるのではないかという危惧を感じずにはいられない。

今回の調査では、次の方々にお世話になりました。ここに深謝の意を表します。大川時政・可児幸彦・川瀬末正・川瀬松一・川瀬良一・吹原
（敬称略・五十音順）

（久保禎子）

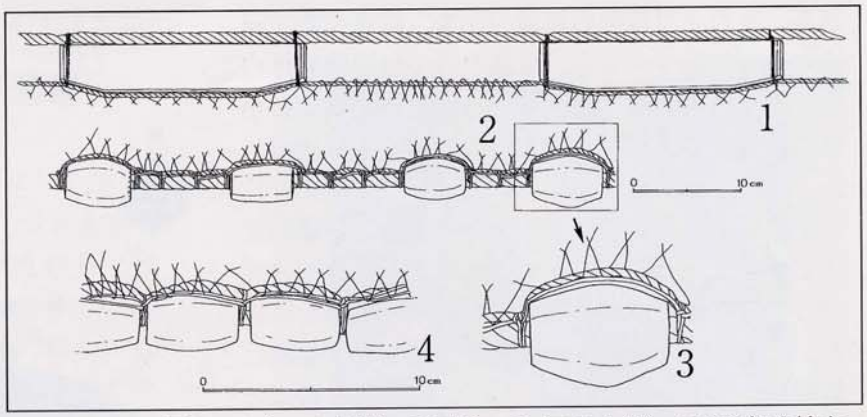


図１　1.図２―A（マス大網）、2.図２―B（マス大網）、3.2の部分拡大、4.アユのメセキ網

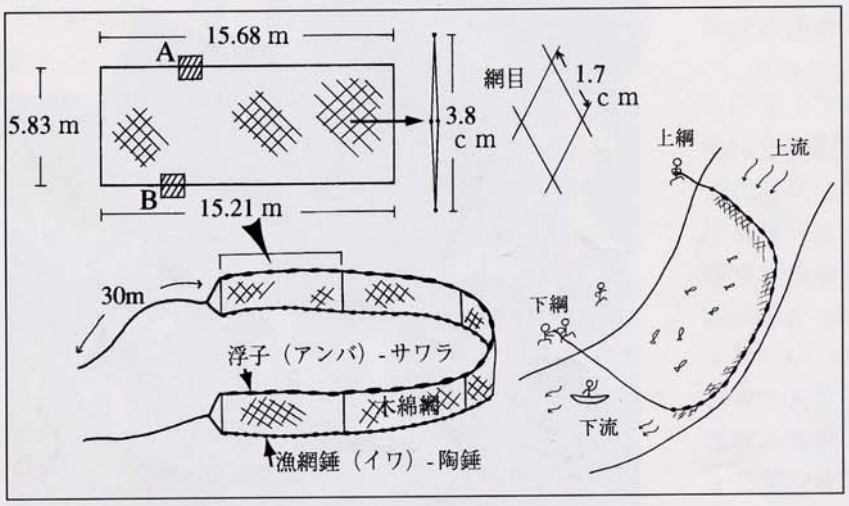


図２　大網全体の概略図と漁の方法

表　葉栗郡における地曳網の統数
『愛知県統計書』より

年	統数	所有者数	専業漁師戸数（人数）
明治41年	5	5	11（11）
明治42年	5	5	9（9）
明治43年	6	6	10（10）
明治44年	7	7	5（5）
大正元年	7	7	6（6）
大正２年	7	7	4（4）
大正３年	7	7	6（7）
大正４年	7	7	6（7）
大正５年	27	15	7（7）
大正６年	25	24	6（6）
大正７年	21	19	5（5）

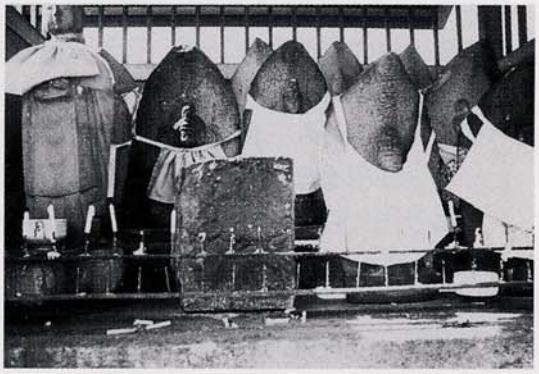
耳寄りな話
—オモカルサマ—

最近では易や星占いだけでなく実にさまざまな占いをする人が増えてきましたが、私たちが暮らしているこの一宮にも迷ったとき、不安なときに進むべき道を教えてくれるオモカルサマ（オモカルイシ・抱き地蔵とも呼ばれます）があります。信心の深い人が「かるうあげてちょーよ。」と願うと、その願いがかなうときは軽く持ち上げることができ、かなわないときは重くて持ち上がらないのです。これは石占の一種で、神が石に宿ることから生まれた民間信仰と考えられています。現在わかっている市内にあるオモカルサマは6カ所にあり、地蔵菩薩の形をしたものが5、自然石が1です。明治時代以降に信仰されるようになったとわかっているものもありますが、そのはじめが不明のものもあります。また、占者が占ってくれるところはありません。写真の西海戸のオモカルサマには、石像の両端に手垢がはっきりと残っています。

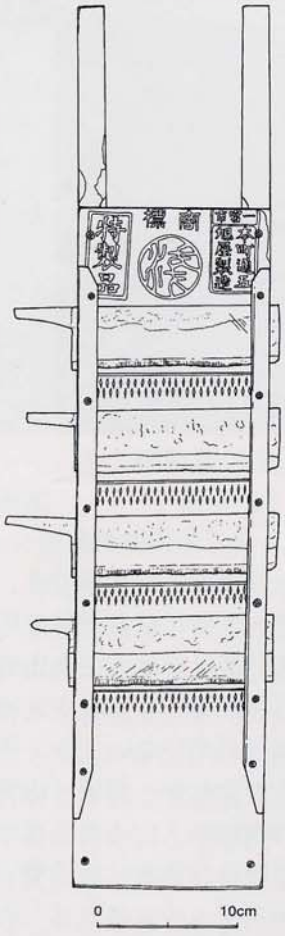
（K）

市内のオモカルサマの分布

↑西海戸のオモカルサマ



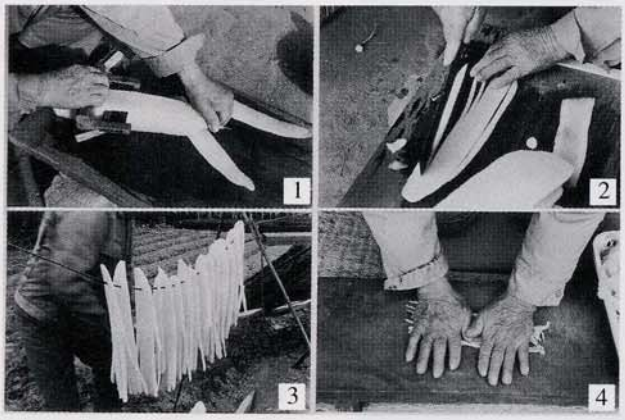
光明寺のオモカリイシ→



尾張平野に冬になると吹く冷たい伊吹おろしは、大根切干をつくるのに欠かせないものです。一宮市南部の萩原町・大和町・丹陽町・西成（旧中島郡・丹羽郡）で盛んに生産され、明治末から大正のはじめにもっとも生産量が増えました。中島・丹羽郡をあわせた明治44年の製造戸数が18,417戸、生産量が1,084,430貫で、農家の現金収入源として大切なものでした。

大根切干の材料は宮重大根で、千切干（センキリ）・輪切干・花丸切干・角切干（オカイコ）・割干・長割干がありますが、左図は大根と一緒に手まで切ってしまいそうと展示室で評判の、センキリを衝く四丁衝きのショウジキです。今年の冬は、明治33年の『愛知独案内』（右下写真）に紹介されている割干を作ってもらいました。できた割干はとても甘く、小さく切って油揚げと一緒にしょうゆと砂糖でたくのが一般的です。（K）

季節の民俗NEWS
大根切干づくり



『新編一宮市史』より転載→

【館蔵資料紹介】

達磨大師像並びに退山偈　　松岡寛慶筆　昭和７年
紙本墨画　　縦 124.6 ×横 58.9 (cm)

1876 － 1934。法諱寛慶。大徳寺派に転じてから紹珉（じょうみん）と改め、喝山窟（かつさんくつ）と号した。中島郡新神戸村（現一宮市今伊勢町）の豪農松岡忠右衛門（初代）の三男。幼名若一。実兄は第一毛織の興隆者として知られる。10 歳の時、知多郡岡田村慈雲寺で得度の後、京都天竜寺峨山老師、伊予八幡浜大法寺禾山（かざん）老師に師事。慈雲寺住持を経て、大正２年 38 歳で中島郡妙興寺住持となり、寺内に妙興禅林を開設、宗門教育に禅堂教育を採り入れ、理想とする僧侶育英事業に心血を注いだ。その徳を慕う者多く、盛時には 100 人余の雲水が集まったという。また、先住寿山老師の遺志を継いで、大伽藍を昔日の威容に復した。仏殿・書院・開山堂などはこの時の新築である。在住は 20 年にわたったが、昭和７年３月 16 日福岡市博多の崇福寺へ転住、間もなく胃癌手術。同８年７月京都大徳寺専門道場師家、９月大徳寺管長に推されたが、翌年病気が再発し、２月 21 日崇福寺に示寂。わずか 58 歳であった。

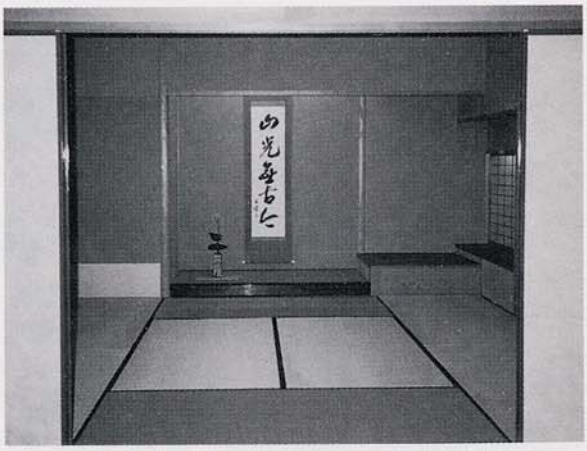
ここに揮毫された偈（げ）は、昭和７年、妙興寺を出る時の作である。

二十餘年不等閑／栽花石山弄／癡頑無来由今没／
巴鼻逐一帆風／下此山　　壬申春日　喝山

（毛受英彦）

「川合玉堂展」盛会のうちに閉幕

（財）玉堂美術館、岐阜県美術館をはじめ多くの方のご協力を得て開催した特別展「川合玉堂－郷土が誇る近代日本画の巨匠－」も 11 月 19 日に無事閉幕。25 日間の入館者は 9,731 人。一日で千人を越す日もあり、当館開館以来、久々の賑わいとなりました。10 月 21 日の開会式は約 130 名のご来賓を得、お孫さんで玉堂美術館館長川合三男氏の、「玉堂が生を受けた地での展覧会は初めてで、まさに故郷に錦を飾ること」とのご挨拶なども頂きました。29 日には妙興寺本坊において、同氏による講演会を開催。350 名以上のご来聴者があり、当地方の玉堂人気の高さを再認識した次第です。



山光無古今（山光に古今無し）

展覧会場では、名作の数々と共に玉堂愛用の印章を陳列。陶芸家・料理道で著名な北大路魯山人の作が多いことは特に注目されました。彼が元々篆刻家だったことは余り知られていないようです。また、隣の和室には、玉堂の珍しい一行書「山光無古今」を特別陳列。その筆跡は、亡くなる前年の作とは思えぬ、高僧の遺墨を彷彿させる力強いもので、日本画とは別の一面をみせてくれました。

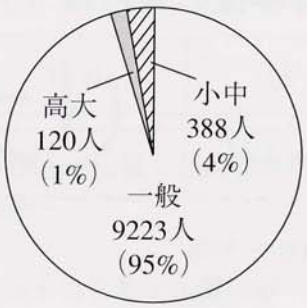
【博物館日誌（抄）（7.9.1～2.28）】

7. 9.17　博物館映画劇場
　・「からむしと麻」
　・「水法の芝馬祭」
7.10.21～11.19　特別展「川合玉堂－郷土が誇る近代日本画の巨匠－」
7.10.29　講演会「玉堂の人となり」
　講師　玉堂美術館館長
　川合　三男 氏
8.1.9～2.25　くらしの道具―今と昔―

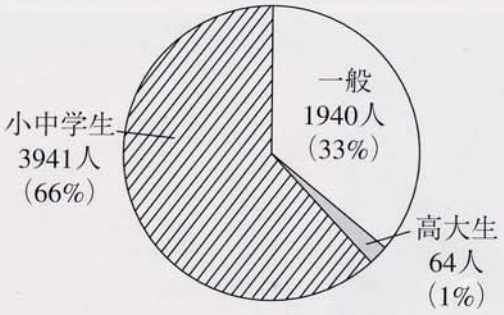
【ご来館有難うございました（7.9.1～2.28）】

岩倉市社会福祉協議会　愛知県立一宮工業高等学校　愛知県婦人文化活動協会　千秋中学校　蒲郡水墨画協会　とわの会　北部中学校（養護学級）尾西市文化財めぐり　稲沢市立国分小学校　一宮市手をつなぐ親の会　一宮市民文化財めぐり　今池俳句会　淡交会那古野青年部　愛知県造形教育研究会　海老名市職員　今治市商工労政課　蒲郡市青少年問題協議会　石川県能登上布マーケティング検討委員会　一宮市社会福祉協議会　愛知県社会教育主事連絡協議会尾張支部

【展覧会開催中の入館者数】



特別展「川合玉堂－郷土が誇る近代日本画の巨匠－」
10/21～11/19　入館者数　9731 人 /25 日



収蔵品展「くらしの道具―今と昔―」
1/9～2/25　入館者数　5945 人 /40 日

【博物館の刊行物】

博物館で現在販売・配布している展示図録・解説書・パンフレット・文化財調査報告書を紹介します。

＜展示図録・解説書・パンフレット＞

・「美人画にみる繊維の手仕事－蚕織錦絵－」	500 円
・「有隣舎をめぐる人々，森春濤とゆかりの詩人展」	無料
・「一宮の名宝（Ⅱ）」	400 円
・「尾張のもめん－そのルーツを求めて－」	620 円
・「古墳のまつり－はにわ－」	無料
・「一宮の名宝（Ⅲ）」	600 円
・「尾張の戦国武将－兼松正吉－」	無料
・「木曽川とくらし」	無料
・「地機で織る－越後縮－」	620 円
・「陶器の源流－須恵器－」	無料
・「豊蔵の至芸」	800 円
・「一宮のまつり」	無料
・「村瀬太乙の世界」	無料
・「つくる－一宮の職人－」	無料
・「埋蔵文化財出土品展」	無料
・「漢詩人・森春濤の遺墨」	無料
・「埋蔵文化財出土品展９２」	無料
・「古地図でみる一宮」	無料
・「結城紬－地機で織る（Ⅱ）－」	800 円
・「一宮の名宝（Ⅳ）」	600 円
・「漁の技術史－木曽川から伊勢湾へ－」	無料
・「藍華やぐ－染めと織り－」	無料
・「田所遺跡と光明寺－大溝と墳墓堂－」	無料

＜文化財調査報告書＞

・「一宮の民俗」	1,000 円
・「池之上遺跡発掘調査報告」	300 円
・「一宮の民家」	1,000 円
・「樫の木文化資料」	400 円
・「一宮の民具」	800 円
・「一宮の石造遺物」	1,000 円
・「市内遺跡発掘調査概要報告書」	900 円
・「文化財めぐり」	800 円
・「法圓寺中世墓遺跡発掘調査報告書」	800 円

平成８年度の博物館（予定）

4月	5月	6月	7月	8月	9月

春季特別展「賢治・志功・一英
—児童文学を巡る人々—」
4/27～5/26
宮沢賢治生誕百年を記念して、昭和初期、郷土の象徴派詩人佐藤一英が編集した雑誌「児童文学」で回合した、賢治と世界的大版画家棟方志功。当時の詩や児童文学、版画の世界を席巻した、これら三者の交流と研鑽を探る。

収蔵品展「江戸後期からの日本画」
7/20～9/16
江戸時代後期以来、名古屋・岐阜を中心とした尾張地方は日本画の大変さかんなところだった。この展覧会では、中林竹洞・山本梅逸・渡辺清・喜田華堂をはじめ、館蔵品の中から日本画の優品を紹介する。

☆編布・弥生機講座

10月	11月	12月	1月	2月	3月

連続講座（9/22,9/29,10/6）
「尾張平野を語る」
自然と人と歴史をテーマにした３回連続講座。

収蔵品展
「くらしの道具—今と昔—」
1/7～2/23
今年度で６回目をむかえる、小学校３年生のための展示。

作品展
「第８回手つむぎ・染め・織り展」
3/9～3/30
繊維講座受講生・尾張木綿伝承会員の作品展。

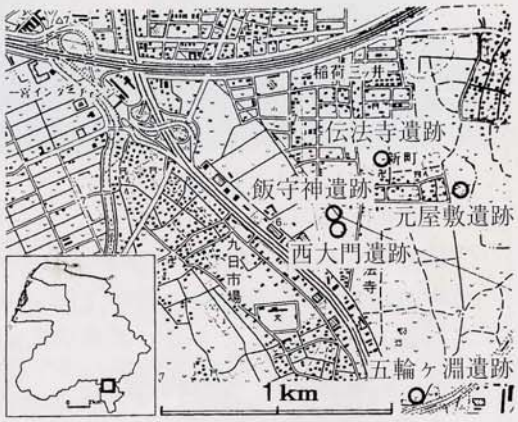
☆土器づくり　☆島文楽公演

最近の博物館　NEAS NEWS NEWS

元屋敷遺跡の発掘始まる！！

たよりNO. 9（平成２年）でお知らせした伝法寺地区区画整理事業に伴う発掘調査がいよいよ始まり、考古学担当学芸員は伊吹おろしが吹くなか左手に携帯電話、右手にガリを持って奮闘しています。現在発掘しているのは、昭和36年に発見され古墳時代初頭の尾張地方の土器の基準とされてきた元屋敷遺跡です。当遺跡では、このほか弥生時代前期と鎌倉～室町時代の遺物も発見されています。

今後、図に示した伝法寺遺跡・飯守神遺跡・西大門遺跡・五輪ケ淵遺跡も発掘することとなります。



一宮市博物館だより　第21号
平成８年３月25日
編集・発行　一宮市博物館
〒491　一宮市大和町妙興寺2390番地
TEL 0586-46-3215
FAX 0586-46-3216